

佐渡 「学校と地域を考える集い」から

編 集 部

09年11月9日、夕、佐渡市羽茂で標記の集いが開かれました。そこでの境野健児さん（福島大学教授）の問題提起および質問と答えとまとめです。

（編集部）

集いのねらい

—佐渡の全体像を住民の力で描こう

主催者を代表して菊池一郎さん（にいがた県民教育研究所理事）が、挨拶し、中川まさみさん（佐渡市議会議員）が司会で、会の趣旨を次のように説明。

佐渡が市町村合併して6年目になりますけれど、地域や佐渡の将来がどちらを向いていったらいいのか、全体像として住民の力で調査をしようじゃないか。今夜はその教育関係のひとつの機会というふうに理解し

ていただければありがたいです。

1、問題提起—子どもは学校と地域で育つ

福島大学の行政政策学類の地域文化講座で仕事をしている境野です。

私の考えている大きな研究テーマというのは、ここにもお子さんが、いらつしやいますけれども、このお子さんたち一人ひとりがほんとうに学校だけで育つのだろうか、学校と地域が一緒になって育てるのが一番いい育て方なのではないか、一生懸命研究しております。今日はお話できませんけれども、一つは伝統芸能というのを追いかけております。あるいは伝統行事というのですか、日本も地域が様変わりしているわけ

ですけれども、またまた子どもたちが主役の虫おくり行事だとかあるいはお囃子の太鼓を練習して地域の祭りを盛り上げる役割を果たすとか、失われても当然のことをやっているところを追いかけておりまして、そこでの子どもたちの育ちの豊さを研究しております。

二つは、学校給食における地域の地場産の野菜、卵、味噌とかその地域で採れたものを出来るだけ学校給食で使えるような仕組みを研究しております。それも子どもたちの健康や身体づくりを支えていく学校給食を学校と地域の人が一緒になって考えていこうということとを研究しております。

三つは、そのことができるためにも、出来る限り学校というのは地域社会に近くなつた方ができやすいのではないかと思っております。学校と地域社会を一番離してしまうのが学校の統廃合ということ、戦争前からのことも研究しております。

最近津南町と十日町市の自治体問題を研究する人たちに私も呼ばれまして、学校統合が起るのを、どう考えたいか、勉強してきた成果が、この報告書に載っておりますので、みていただきたいと思います。

そういうことで、学校と地域社会の結びつきがとて

も大事なので、それを引き離していくのが学校統廃合かなと思っております。

昨日、新潟市で学校統廃合を考える集いがありました。佐渡で学校統合が話題になっているので一度一緒に来てお話を伺おうということで、今日は午前中、教育長さんになぜ学校統合をすすめるのか、という話を聞いてまいりました。午後はちよつとかけ足だったのですが、三つの小学校を訪問してきました。たまたま、校長先生が会合でどこの学校もいませんでしたが、市の教育委員会に依頼しておきましたので教頭先生からそれを通して説明を伺いました。(30〜35頁参照)

統合問題がどうこうについては、学校の先生方は語ることは出来ないのか、しゃべらないようにと言われているのでしょうか、そういうことは話題になりませんでした。

私が非常にびっくりしたのは、小村小学校と大滝小学校と川茂小学校と三つの学校は、どれも小さいのでびっくりしたのです。また日本のこういうところに小さい学校がこういうふうにして健在の姿でいい学校の雰囲気を作っているのだということで、まず、外側の景色に感動してきました。

三つの小学校と地域の協力

小村小学校は、能をクラブ活動で教えている。小学3年生以上が能を練習して地域の祭りに発表するわけですが、実際には能を誰が教えるかというと、学校の先生が出来ないものだから、地域の人が学校に来て教えるということです。地域の人が子どもたちの舞を指導する。そういうのを聞きながら、山形県の小国の歌舞伎と小学校を思いました。その学校も歌舞伎を地域の人が熱心におしえているのです。子どもたちの話を聞きますと、歌舞伎ですから斬られて死ぬシーンがあり、子どもは作文に書く。「ほんとに自分が役者になって人間が死ぬっていう格好をするのはとても難しい」と。子どもたちが、歌舞伎とか能をとおしても非常に豊かな表現の力を身につけ、子どもたちは幸せだなあと思いました。

大滝小学校では子どもが、わずか13人くらいしかないですが、「あごだし」を作っている。私は全然知らなかったのですが、小学校1、2年生が、とびうおの内臓を開いて干す。1、2年生で全員が包丁を使えるのです。これは大変なことです。先日、石川県の小浜にいき、そのキッズキッチンを見ました。小さな

子どもたちに包丁を使わせることをやっているが、親は絶対にそばにさせない。親は、手を出してしまうからです。子ども達には手の上で豆腐も切らせます。保育園、幼稚園の子です。そういう風にして、包丁を使うということはどういうことなのかを学ぶ。大滝小学校ではもつとすごい包丁の使い方魚をさばかせている。おそらく私の大学のゼミ生、10人近くいますが、魚をさばいたことは一回もないでしょう。地域が持っている文化です。すごいなあといい思いを強くなりました。

今年止めたそうですが、そばも種を撒き収穫し、粉にひいて、そば打ちもちゃんとして、おそばを作ると。大崎地区はそばで有名な市ですが、こういう食の文化がある所は良いです。柿も学校で2000個も取るといいます。柿は伝統的な作物で、子どもたちが、育てて収穫することもやっている、先生はそういうことは素人ですけども、地域の人が来て指導する。福島県に喜多方という市があり、小学校に農業科がある。総合学習の時間に年間30時間から45時間、コマ作りの全過程をやる。育苗からはじまり、最後は8月の初旬に稲の花を見せる。つまり、実をなすものはすべて花が咲いて受粉して実になるといことをわからせ

るためにやるのです。できたときに一本の穂から何粒のコメができるか勘定させる。そうすると、三粒の種からお椀一杯のコメがとれる可能性がある、ということ子どもたちに教えるのです。

子どもたちの作文を読むと、田植えをするときに私はいつも命を植えているのだと書く子がいる。コメ作りかと、軽く見るのは大間違いで、子どもたちが、食べることを通じていわば命を育むということを知るのとかが、そういう技術を学ぶとか、先人の知恵を、学んでいるわけです。機械ではなく手植えでやっていますから尚更です。

川茂小学校は、民話劇をやっているのです。民話の里というのですか。これもまたびっくりしました。1年生から6年生までの間に六つの民話をすべて劇にして表現するのです。川茂小学校を終えると民話を、六つ演じる力がつく。学校は、民話の語り部を呼んで、子どもたちにすばらしい語りを聞かせるわけです。それを基にしながら、今までの歴史もありますけども、大きな道具を使ったり、あるいは子どもたちと一緒に台本を考えたり、忙しいときには前の台本を使ったり、子どもたちに表現するということをさせている。

こういうふうなことを聞きながら学校というものは先生が教え、子どもが学ぶ世界だなと思ったのですが、この三つの学校を通して、学校を開くことで、子どもを教えるのは先生だけではないのだ、やはり地域の人たちの知恵や力がこどもたちを育むのではないかというところを、改めて強く感じました。ですから、学校を開くことによって地域之力と結びつくことによって、教育の本身や意味が非常に重要になってくる。

もう一つは三つの小学校では、教える人が、地域の人がとても元気になる、お年寄りが、生き生きと子どもに教えるというのです。そうしますと、学校を開くことによって、もしかすると高齢化社会の中で、お年寄りたちを元気にさせているのも学校ではないかと思うくらいです。学校を地域に開くことの意味が大きいように思います。

ですから、地域があつて、学校があつて、また地域が生き生きする、そういう関係があるのではないかというふうに思っています。そういう貴重な宝があるいは財産が、この地域には豊かにまだ残っているのかなと、わずか三つの小学校でしただけでも、もつともつと他にも残っているのではないかと思えます

佐渡の学校統廃合について

今日は午前中、教育長さんに会いました。地域との関係をとても大事にしている学校がいっぱいあるのに、小学校でも36校あるものを14校に。そのうち3校を残す、3校は統合できないような遠いところにあるということ、学校の大きな再編が始まるうとしていいる。なぜかと聞いてみましたら、複式は出来ればなくしたい、と。なぜなくしたいのか、不明です。高知県教育委員会は子どもたちの学力は複式だから低いとは言えないと述べています。多くの人たちが複式に不安を持ちながらも、学力的にはあまり問題はないのではないかと、思っています。今日も教育委員会の人は複式廃止の理由は何も言わなかったのですが、学力はどうでしょうかと聞きましたら、複式だから低いというデータはないと、佐渡の教育委員会でも言っておりました。それから、もう一つは子どもたちに社会性を身に付けるためにも出来れば大きいほうがいいのだと、現状から言えば、1学年2学級くらいとか、あるいは通学距離が小学校では30分、中学校では50分というようなことを言っていて、現在でもスクールバス等定期代だけで小中学校合わせて5000万円くらい出しているのです。

これが統合により、さらに交通費を増やさざるを得ない。どのくらいまで出すのかと聞いたたら「計算していません」ということでした。おそらく予測でいえば、倍以上はかかるのではないかと、つまり年間1億円以上は交通費を出さないと統合になった場合やっつけけないと見ます。

私の感じとしては最初に統合ありきということで最初に計画を作って、進めていこうとしているのかなと思います。無理強いはいらないと言っておりました。

なにが問題かというと、学校をなくす、少なくとも一番の変化は教員の数が減ることです。教員が減るということは、県と国のお金の負担が少なくて済むということ、市町村の段階でお金が減らせるのは用務員さんや給食調理員さんなど町職員の整理、合理化です。もう一つは、学校の施設設備です。修繕費とかは校数が多ければ多いほどかかりますから、そういう経費削減もあるのですが、佐渡市の場合にはご存じのように、合併以降、相当数の町全体として経費がかかる項目を削減すると、そういうものを比較して保育所、病院、学校、となってきたわけです。

確かに財政は厳しいです、その事情も分かりますが、

ただ、これからの佐渡のことを考えたときに、これからの地域の発展を考えた時に、なんでも一律に削るのではなくて、せめて教育、子どもの教育についてはそこで十分に学べることをもつと配慮できないのでしょうか。そうなれば、子どもを大事にしていると、そういう佐渡市というイメージで佐渡市がもつと明るくなるのではないのでしょうかと言ってきました。

2、質問に答えて

Q、義務教育の学校通学は

私、昔、フランスのピレネー山脈の遊牧民の子どもたちの学習がどうなっているか調べたことがある。したら、遊牧民を先生が追いかけて教えるのです。つまり、子どもたちに教えるのは子どもが住んでるところで教えるのが義務教育の原則だと僕は思っているのです。自分の住んでいる通える範囲で行けるのが学校であり義務教育の原則で、おそらく文部科学省も通学距離は小学校4キロ、中学校6キロ、それ以上を遠距離通学といっているのです。だから、その範囲が基本的には通うところじゃないでしょうか。

Q、全国的な学校統廃合は

都合の場合では、今進んできているのは学校選択制。学校を自由に選べる、品川区なんかは全区、どこでも選んだ学校に行ける。そうなると思われない学校はつぶれていくということになる。それに比較して佐渡市は、行政的に一定の枠組みでこういう順につぶしていきますという計画です。それで今、選択制の側で、群馬県の前橋であるとかいくつかのところで選択制をやめようという動きが生まれています。その最大の理由は、学校と地域の関係がなくなることです。私立学校では地域と私立の学校の関係というのは切れます。都会に住めばよくわかります。そういうふうに地域と学校を結ぶのは大事ではないかと、見直す時期に来ています。

学校統廃合で、市町村立学校を再編するかしらないかというのは市町村が決めるから条例の改正が必要なんです。佐渡市の学校設置条例があるのを変えることです。ところが、新潟県も、茨城県とか長崎とか全国的に、県が学校統合計画を持ち始めた。なぜ、そうなのかというと、さっきもすこし触れましたが、学校統廃合で経済的に一番プラスになるのは人件費です。教員の人件費を減らす早い方法は学校を減らすことです。そういう

ことをやることによって、いままでは国が2分の1、都道府県が2分の1だったものが平成18年の三位一体改革の中で国が3分の1、県が3分の2となった。都道府県が人件費削減のためにどうしても学校をつぶしたい、となったから、各県が学校適正規模案というものを持ちこんで、市町村合併の絡みの中で各市町村に作られている。佐渡のみでない。そういう点では、実は中国でも統廃合は進んでいる。中学校でも寄宿舎生活をしている中学校はたくさんあります。

Q、子どもの人数と学校・地域の関係は

いろんなご意見はあると思いますが、大事な論点です。少なくとも地域というのはいいのだと、子どもが少ない時期は考えなくてはならない。少ないところを、どのくらいの基準で考えたらいいかという問題です。

学校というイメージというのは、いっぱいあると思う。学校は、クラス編成がされて、いろんな遊びをしたり、いろんなことを一緒にやってみたりとか。そういうイメージしか持っていないのですが、実は日本の学校というのは、地域の人の中で、地域のカレンダーで学校が動いていた時期もあった。農繁休暇とかイナゴ取りだとか、そういうのがあった。子どもたちを実

際に育てていくのは学校だけでなく、もしかしたら家庭の暮らし方や、地域の生活が学校や子どもたちを育ててきたのではないか。学校になるためにあまりにも条件はこうだとばかり考えていますが、子どもたちが生活の場で学ぶ、あるいは学校で学ぶという風に考えると、人数が少ないとか多いとかいうのではなく、学校はある地域で子どもたちが育つということをもっと大事にした方がいい。何人がいいとかそういうことではなくて、もちろん学校はなくなる時があると思う。一番大きいのは学校も自然死がある。これは学校のせいではない、地域で暮らしていけなくなれば住めないわけですから、どうしても親たちがこの人数ではとか、将来これだけでは不安だとかという議論はあると思う。ただ強制的にこっちの学校に決めたからこっちにいらっしやいということによって子どもと地域の関係を壊していくのは教育的なのかと言ったら、あまり教育的ではないのではないかと思えます。今日、3つの小学校へ行きましたが、統合するところもあり、もったいないなあと思いました。一回つぶれた学校というのは絶対作れませんから。作った例がないのです。分裂することはあります。人数が多くなつて、そういうことは

ありますが、地域の貴重な財産ですから、大事にしたいと思えます。

Q、市の財政と統廃合の関係は

今日、わたしは教育委員会に言いました。今の日本のたとえば佐渡市は非常にお金が困っているときに、校舎の壁が壊れた時に壁を直すとか、雨漏りがするのだったら雨漏りを直すとか、もしそういうことがあったときに、地域の人たちは応援するでしょう。お金がないところでは地域にお願いして直してもらいましょうと。子どものためだったらみんな力で力を合わせましょうという、支え合いの気持ちはあると思う。

今言ったように学校が小さければ小さいほど父母と先生が近くなるから、先生も背を向けられないというのはあります。学校が大きければどうしてもその部分は弱くなります。

そういう関係を地域で作っていく。そういう条件が、今日行ってみてずいぶんあるという思いがした。そういう条件を奪うことが悲しいわけです。皆さんがおっしゃったように実は学校統合というのは、僕は教育的な論議だと思うのですが、町とすればもちろん教育的話はしますけれども、根っこは今の佐渡の財政的な状

況を何とか良くして行かなくやいけないということでは本当に断腸の思いで教育も整理の側面で考えているのかなと思えます。ここに来ている人はおそらく、なぜ地域の人は来ないのだろうと考えたりされているでしょう。実際のところ地域の人でも賛成も反対もある。学校統合をずっと見てきて、一番不幸なのは学校の問題で地域住民が割れるという問題です。子どもに全然何にも責任はないのに。学校統合は、子どものための統合なのだから、いわば子どもに害を与えないような、子どもに何か無理強いをしないような、そういう丁寧なやり方をやらないと困るなと思います。そういう点では拙速なのかなあという感じがして、さきほどなんか悔しい想いついていうような話が出ましたけども、そんな風なことを感じました。

3、まとめ—地域の価値の再認識を

経験の役割を見直す

それで私がいつも考えていることは、子どもたちが育つとは何かということ。学校でというだけではなくて地域の自然や文化でも育つと言ったのですが、あまりにも学校で教えることだけが重視されてきた気

がするのです。自分の経験に即しても、今の大学もそうですが、今の学生にとても大事なのは、経験です。頭でっかちだけれども、その頭でっかちを支える経験が非常に貧弱になっている。想像力がつかないわけです。たとえば日本の学力テストもそうですが、反復練習ではいい点が取れるけれども、応用的なことを考えると非常に弱い。なぜ弱いのかというと、反復練習というのは機械的に覚えるわけですが、自分で考え、自分で表現する、自分で調べて自分で探すとか、あるいは人がやっていることから学ぶとか、そういうことがすごく弱くなってきた。日本の学びには二つあって、一つは文字による学問、学校による学問。もう一つは不文字の学問があると内山節（哲学者）という人が言っています。日本の教育、子どもたちの子育てから不文字の世界をものすごく軽視したのです。そのつげが今ここにきているのではないか。その不文字の学を教えるにはどうしたらいいのか。私が最初に、能とか、お米とか民話であるとかそういう表現する世界を言いましたけれども、その力は大きいと思います。その中で算数の成績が悪くても、「お前、舞台上手だな」「お前、舞いが上手だな」「コメの作り方うまいなあ」

と、この一言がどのくらい、学力をつけるか。僕はそういう風に思います。今の子どもたちは自信のせいで世界をものすごく狭くさせられている。そのために地域にある活力を見直してみる。

地域の緑・自然の値打ちを見直そう

僕も実は都会に住んでいて、土がほしくて田舎暮らしを最近始めているのです。自分でお米づくりも始めましたし、野菜も作っているわけです。私は福島の飯野町に家を買って、そこに住んでいます。築150年から170年くらい前の家を買った。地域の人のうわさになって、頭が変なのじゃないかと。不動産屋さんもそれを買う時にこの家は一銭の価値もないから、損するだけだ。つまり、この家は銀行が金を貸してくれない。でも思い切って買った。地域の人はここには高校がない、その当時はコンビニみたいなのがない、病院がない、みんな違うところに移りたいと思ってるのに何で来たのだ。僕はここに田んぼと自然と林があるからだ。そして、その人たちが、こんなの一銭の金にもならない。僕から見ればほしいものを地域にいる人は価値が見えない。このズレがある限り地域は作れないと思った。

何を言いたいかというと、そういうことを感じて都会から来る人もいるわけです。そのことを、あの変わり者くらいにしか見ていない。すぐく大事なことを地域に発信しているのを見てくれない。そこに今住んでいる子どもたちが可哀そうです。親たちが、この地域は良いと思つてないのですから。その子どもたちがとても可哀そうだ。だからほんとうに地域をよくしていく、地域の価値を考え、良くして行くことは子どもたちの育ちを守ることに一致しているのです。そういう時代に入つて来た。そういう問題提起が、実はきょうの質問の中にもたくさんあつたのではないかなと思います。

学校は地域が生み、育てた

ここの菊地 一郎さんから、「羽茂小学校一〇〇年史」というのを読ませてもらった。お年寄りがこの学校をつぶしたくないと言うのが、よくわかりました。

学校というのは、市町村立ですから、佐渡市が作った、佐渡市が維持していると思うかもしれませんが、その原点は、この羽茂小学校もそうですが、明治に学校ができた時に地域住民が土地を提供し、教師を雇い、建物を作つて来たわけです。学校というのは、何々村立とか行政が決めるわけでも、その根っこに

なるものは地域が脈々と支えてきたわけです。だから、「おれたちの学校なのだ、なんでおれたちの学校をいらないというのだ。あるいはつぶせと言うのだ」と、そういうことを言ったときに、やめてくれと言うのは地域住民の思いからはよくわかることです。すぐく寂しい思いをしているのではないか。お年寄りはそのうちあの世へ行くのです、確実に、僕自身もそうですが、でも、子どもたちのところへ来るお年寄りは輝いているといふのです。なぜかというとお年寄りはそのまま死んでいくのではなくて、60、70歳になつても子どもたちのために役立つ人間としてあの世に行くのです。学校を開くといふことで、そういう大事なことをやっているのではないかと。そういうものをうんと大事にするのが地域を大事にする、学校を大事にするのではないかなと思つています。ほんとはそういう話を、いっぱい話したかったのですが、そういう機会がありませんでした。貴重なお話を伺わせていただいて、またあらためて勉強して、佐渡の南部にきてみたいと思います。きょうはほんとうにありがとうございました。

(文責・吉田武雄)